

声劇台本 「こころみ」

【登場人物】

- ・主人公 大きな悩みごとを抱えていて、その影響で引きこもるようになってしまった。考えることの苦しさから逃れる為ほとんどの時間を眠りに捧げているが、その生活も本当は苦しいと思っている。
- ・案内人 「夢」そのものの擬人化のような存在。主人公自身の無意識や記憶を全て知っているので、それを整理して後押ししてあげるような立場で登場する。

・友人

・学校の先生

・主人公の母

・医者

(鳥の囀り。)

主人公 「朝、だ…。」

主人公 「今日も…眠れなかった…。」

(扉のノックの音。)

母 「起きてる?…ご飯、部屋の前に置いておくから。食べ終わったら食器下ろしなさいよ」

主人公 「うん。」

母 「……それとき、良い病院とか探してみようと思ってるんだけど…」

主人公 「良いって。ご飯置いといてくれたらそれで大丈夫だから」

母 「でもあんた、それじゃあいつまで経っても…」

主人公 「そういうのいいから！時間もお金もかかるんだしさあ…！もう…もう、ほっといて！」

母 「…わかった。とりあえず、ご飯は置いとくから。食べれるときに食べなさい。」

(階段を降りる音)

(母親と誰かのぼやけた話し声。)

主人公 「あーあ。どうせ、悪口でも言ってるんだろうなあ。」

主人公 「…目を瞑ったら、そのままずっと覚めなければいいのに。」

案内人 「…ん。…さん！」

主人公 「ん、…んん？」

案内人 「お寝坊さーん。お、き、て、くださーい！」

主人公 「…ちよつと、うるさいな。」

案内人 「あ。やあつとお目覚めですか。おはようございます、お寝坊さん？」

主人公 「…誰？」

案内人 「おっと、ご挨拶が遅れました。なにしろ、アナタのお目覚めがゆっくりだったもので。私は…そうです
ねえ、案内人…とでも呼びください。」

主人公 「案内人？」

案内人 「はい。以後、お見知りおきを。」

主人公 「いや、そういうんじゃない、名前を聞いて…っていうか、ここ何処！？真っ暗なんだけど…。ま、
まさか…！」

案内人 「なんです、さてはアナタ…私を誘拐犯とでもお思いですか？」

主人公 「そうじゃなかったらなんだってんだよ！」

案内人 「違いますよ。なんていったってここは――」

案内人 「アナタの夢の中、ですからね。」

主人公 「は…？ゆめの、なか…？」

案内人 「ええ。ここは夢の入口です。けれど…現実世界に戻るための扉は、もう消えているみたいですね。つ
まりアナタは、迷子ということですよ。」

主人公 「えっ。じ、じゃあ、起きれないの？」

案内人 「おや、帰りたいですか？ふふ、ずいぶん気持ち良さそうに寝ていたものですから、てっきりこのまま
でいたいのかと。」

主人公 「っ…。」

案内人 「長いこと道に迷っている、みたいですね。きっと出口までは時間がかかりますよお。…どうでしょう。
私と一緒に、散歩でもいいかがです？案内してあげますから。」

主人公 「ま、まあ…起きれるかは、別として…。こんな暗いところにずっといるのも嫌だし、ついてってあげ
てもいい…。」

案内人 「そうですか！わかりました。では行きましょう！」

主人公 「あっ、もう！急に引っ張らないでよ！」

主人公 「はあ、はあ…。ねえ、もうだいたい歩いたけどお…？」

案内人 「さあて、ここらで寄り道といきましょう。」

主人公 「寄り道って…やだよ！疲れてんだって…」

案内人 「いいからいいから！さ、こちらですよ。」

主人公 「うわっ眩し、急に光が…ってなにここ、パン屋さん…？」

主人公 「…あれ、ここって…。」

友人 「どれにしようかなー！あんパンもいいし、焼きそばパンも捨てがたいよな…」

主人公 「早く決めてよ。」

友人 「え、だって全部美味しそうじゃん！あっじゃあ、これとこれどっちも買って半分こしない？」

主人公 「ん…まあいいけど。」

友人 「やったー！じゃあ決まりね！向かいの公園で食べて帰ろ！」

主人公 「へいへい。」

友人 「んっ！んまっ！」

主人公 「そだね。…ていうかなんで急にパン屋寄ったの？テスト前なんだから、放課後に寄り道してる暇なんてないんじゃない？」

友人 「いいでしょ、これくらい！どうせアンタだって家帰ってもゲームしてんでしょ？」

主人公 「うぐっ…。いや、それは、その…。」

友人 「それに、いつも言ってるじゃーん！自分へのご褒美！これ買ったらテスト勉強頑張るって決めてんの。」

主人公 「ふうん…。そんなんで頑張れるの？」

友人 「これ食べたらやる！ってスイッチ入れるの！美味しいもの食べたしやるかっって、意外と行動できるんだよね。で、良い結果取れたらまた美味しいもの食べるんだっ！」

主人公 「また食べるんかい。」

友人 「あははっ！テスト終わったらまた一緒に食べに来よう！」

主人公 「これ、テスト期間中に寄り道した時の…。え、なんで？…いやまあ、夢の中だし過去の記憶が蘇ってもおかしくはないのか…？」

案内人 「そうですね。無意識の中というのは、実に不思議なものです。もしかすると、貴方にとって大切な記憶…なのかもしれませんよ。」

主人公 「大切って…そこまで？ただの友達との日常会話でしょ？」

案内人 「ふふ、どうでしょう？歩いている間に、こういったことがまた起こるかもしれません…それも楽しみながら行きましょう！」

主人公 「ふうん、まあいいけど。次はどっち？」

案内人 「はい、こちらです。さあどうぞ。」

主人公 「あれ、また景色が変わって…ここは…学校？」

主人公 「ふわ〜あ。あー、ねむー…。」

先生 「おうおう、今日も眠そうだな！」

主人公 「あー…最近寝れないし、そのせいでやる気も出なくて、なかなか布団から起きれないんですよ。」

先生 「うーん…。じゃあお前に、起きれない朝のためのおきのテンション爆上げ法を教えてやろう！」

主人公 「テンション爆上げ法…?」

先生 「そうだ！いいか？布団から起きたら、オレはスパイになるんだ。そうだな…スパイっていったら…これだなー！」

(軽快な音楽が流れる。)

主人公 「え？何この音楽…。」

先生 「この瞬間から、俺は高校の教師として潜入し、情報を集めるミッションを達成しなければならぬ。髭を剃り、スーツをピシッと身にまとい、髪を整えたら任務開始…出勤だ。」

主人公 「さっきから何言ってるの、この人…。」

先生 「スパイの朝は忙しい。車の中で昨日買っておいたあんパンを貪りながら、今日のスケジュールを振り返る。どのような一日を過ごすか入念に計画立てることは重要だからな。」

主人公 「は、はあ…。また曲変わってるし。」

先生 「そんなこんなで学校に到着だ。着いたらすぐ職員室へ向かい、教師陣の様子をチェックしながら朝のミーティング。調査道具を準備したら早速教室へ向かえば…スパイとしての一日の始まりだ。」

先生 「…という設定をつけて起床し、出勤するんだ。それっぽいBGMなんかも用意しちゃったりしてな。どうだ、朝のルーティンが楽しくなるだろう？」

主人公 「いろいろ突っ込むところはありますが…。まあ…楽しそう、なのかな…?私は恥ずかしくてできたもんじゃないですけど」

先生 「はははは！そうか！じゃあ練習するか！」

主人公 「え!?!いや、やりませんって！」

先生 「遠慮するな！そら、こうやって…」

(チャイムの音)

主人公 「あっほら！そんなことしてる間にホームルーム始まっちゃいますって！」

先生 「ん？いや、気にすることないぞ？先生、ずっとここにいてやるから。」

主人公 「へ？」

(ドン！と物を置く音)

先生 「ほい！遅刻した分の反省文！書き終わるまで見ててやるからな！」

主人公 「…ま、マジ？」

先生 「マジだ。学校の決まりだから、すまんなあ！」

主人公 「そんなあ…。」

案内人 「何だかとても楽しそうな先生ですねえ」

主人公 「うるさいだけだよ…」

案内人 「そうだ！せっかくですしアナタも踊ってみましょう！お手をどうぞ！」

主人公 「わっ…ちよっと…！」

(しばらくダンスミュージックが流れる。)

案内人 「楽しいですねえ！どうですか、アナタは？」

主人公 「別に…。」

案内人 「ですがこうやって踊ったり、美味しいものを食べたりすることで楽しい気分になりませんか？」

主人公 「馬鹿馬鹿しい。ぜんぜん楽しくないよ。…こんなんじゃ解決してたら、毎日眠れないわけじゃないじゃん。」

案内人 「…少々、調子に乗りすぎてしまいましたかね。気分を悪くさせてしまったのなら申し訳ありません。」

主人公 「なんとなくわかるよ。気遣ってくれてるんでしょ？でも、もういいよ。出口も一人でどうにかする。…じゃあね。」

案内人 「お待ちください。もう少し、私に案内をさせていただきませんか？」

主人公 「なんで？別にもういいって。」

案内人 「どうかお願いします。…出口まであと少し、ですから」

主人公 「…わかったよ。好きにすれば」

案内人 「ありがとうございます。それじゃあ、行きましょうか。」

母 「…わかった。とりあえず、ご飯は置いてくから。食べれるときに食べなさい。」

母 「…ふう。」

(電話の音)

医者 「はい。こちら、こころクリニックです。」

母 「…もしもし？この後、ご相談したいことがあるんですけど…。」

主人公 「これって、今朝の…。」

主人公 「アンタ、また寄り道したの！？やめて、聞きたくない！」

案内人 「大丈夫です。大丈夫ですから、目を逸らさないで。」

主人公 「え…」

医者 「…そうですか。お子さんがあまり眠れていらっしやらない、と。」

母 「ええ。今、訳あって学校を休ませているんですが…それだけじゃなかなか、どうにもならないみたいで。」

医者 「大きな悩みを抱えている時は、沢山の休憩が必要ですから。ご本人に聞いてからでないと判断はできませんが、睡眠を補助するためのお薬を試してみるのもいいかもしれません。」

母 「…：…やっぱり、そうですよね。」

医者 「…：…どうかされましたか？」

母 「あの子、なかなか部屋から出てきてくれなくて。こういう話もしたいとは思ってるんですけど、難しいですね。」

医者 「…：…そう、ですね。」

母 「でも、こんな所でめげているも仕方ないものね。明日も声、かけてみます。また何か進展があったらご連絡させてください。」

案内人 「立ち上がってみてもいい頃なのではないですか。今度はあなたの番。今見てきた中のどれかを選んで選ば

なくても、全てやってみてもいい。それでも何も得られなかったら、ここへ戻ってくれば良いのです。」

主人公 「うん。そう、だね」

主人公 「……自分さあ」

案内人 「はい。」

主人公 「ひとりですーっと悩んでたことがあるんだよね。他人からしたらすっごいどうでも良いような、ちっぽけなこと。」

案内人 「はい。」

主人公 「誰にもわかってもらえないと思ってた。わかってもらえなくていいと思ってた。それで、ただただ、このままずっと眠っていられたら……って、ずっと自分の殻にこもってた。…あはは、ほんつとに、笑えるくらい何も見ないようにしてたんだね。」

主人公 「でも…自分が何も知らないように、やらないようにしてただけだったのかな。意外とみんな、自分で自分の機嫌取ってるんだなって思ったし…それを教えてくれた。」

案内人 「…はい。」

主人公 「あと…。心配してくれる人がいるってこと。…卑屈になってたから、全然わかんなかったや。」

案内人 「そうですね。」

主人公 「見えなかったことだらけだし、みんな明るくて、自分に同じようなことなんて出来る気がしないし、この先どうしたらいいかわかんないけどさあ…」

主人公 「なんか…ちょっとだけ。ちょっとだけ、すっきりした。だからありがと！案内人さん。」

案内人 「いえいえ。私はただ、出口へご案内しただけですから。」

案内人 「…戻られるのですね？」

主人公 「うん、そうしてみるよ。」

案内人 「わかりました。…それでは、いってらっしゃいませ。」

主人公 「それじゃあね。…って、外暗っ！？出口までこんな真っ暗なの！？ねえ案内人さ——」

(とん、と背中を押す音)

主人公 「ぎゃっ！急に押さないで…ってわあああああ！！嘘でしょ、落ちる〜！！」

主人公 「うわあああ！はあ、はあっ…。」

主人公 「あ…。やっぱり夢、だったんだ。」

母 「ちょっとあんた、どうしたの！？すごい声したけど！？」

主人公 「…お母さん。」

主人公 「や、なんでもない。ちょっと変な夢見て。」

母 「あらそう…でも、寝れたのね。夕飯持ってくるから――」

主人公 「ちょっと…待って。」

主人公 「あの…えと…。ご飯…一緒に食べても、いいかな。」

母 「！」

主人公 「あっ、いや、やっぱりなんでもな…」

母 「当たり前でしょ！…ふふっ。じゃあ、待ってるから。支度したら降りてきなさい。」

主人公 「…うん。」

(扉をあける音)

【あとがき】

声劇台本「こころみ」をご覧いただきありがとうございます。今回私が卒業研究のテーマとしたのは、「自分の心を見つめ直すデザイン」です。

私はここ二年ほど様々な事で思い悩み、精神的に疲弊した状況が続いていました。その影響で課題制作なども思うようにいかず、そのまま卒業研究が始まる時期がやってきてしまいました。

正直なところ、何を作ればいいのかも、大きなものを作る自信も、やる気も、何一つありませんでした。悲しみや焦りが襲ってくるばかりの毎日で、手も頭も動きません。

「それなら、卒業研究をやるついでにセルフケアをしてみよう。どうせだったら、好きなもので。」パッと思いついた考えはこれでした。そういえば私は以前からマイナスの感情を芸術に昇華する事が好きで、高校の時もストレス発散の為に声劇を作ったんだっただ。そんな事を思い出し、やってみる事にしました。結果としては、作品の内容が全てだと思います。

「実はみんな、オリジナルの機嫌の取り方を持っていたりする。」

「この先、まだどう進めばいいかわからないけれど、とりあえず行動してみたら何か掴めるかもしれない。」

「自分が思っているよりも、誰かが見守ってくれている。」

この研究を進めていく上で教授や友人と話したり、私生活を見つめ直して、これらの事を理解する事ができました。

この作品は自分で自分を見つめ直すためのものではなく、同じような境遇の人や少しでも悩みを抱えている人が、自分ごとのように物語を辿っていけるような設定にしています。(主人公の悩み事を細かく決めなかったり、それぞれの人物に個人名をつけない、など) この作品を見終わった頃に、少しでも皆さんを出口の扉へと近づけることができたら嬉しいな、と思います。

最後に、この台本を気に入っていただけましたら、ポスターのQRコードを読み取ってみてください。この台本を自身と同級生とで演じた収録データを見る事ができます。是非ご覧ください。